写真／今森光彦……西の湖のヨシ原

# 明日の淡海

Vol.12
2005.3.1発行

自然と人との共生をめざして

Contents


●巻頭言　琵琶湖で遊ぶ …… 2
オプテックス株式会社　代表取締役社長　小林　徹

●県外環境取り組み事例　行政と市民の協働を目指して …… 3
NPO法人「斐伊川流域環境ネットワーク」初代理事長 小谷 武　インタビュー

●くらし　琵琶湖ホテルの秘味つ …… 7
琵琶湖ホテル　志村 昌彦（西洋料理副料理長）　インタビュー

●市町村の輪　市町村エコの輪　生ごみ肥料化とエコライフの楽しみ …… 10
～水口エコライフの会

●ヨシ紙ギャラリー　ヨシ紙ギャラリー …… 12
北村恵美子（日本画家）

●特集　「抱きしめてBIWAKO」で変わったもの …… 13
「抱きBIWA」　事務総長 細谷 卓爾　インタビュー

●私の仕事　環境教育最前線！「菜の花環境学習」を極める …… 17
滋賀県総合教育センター　村地昭彦　インタビュー

●財団活動紹介　ヨシ群落造成事業等 …… 20

●滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより　地球温暖化基礎知識 …… 23

# 巻頭言
Kan・Tou・Gen

## 『琵琶湖で遊ぶ』

オプテックス株式会社
代表取締役社長　小　林　　徹
（財団法人 淡海環境保全財団理事）

カヌーによる琵琶湖一周。もうかれこれ5年以上も前になりますが、楽しく懐かしい想い出が一杯つまっています。雨上がりの早朝のモヤの中を、奥琵琶湖の景観や風情を満喫しながらパドリング、竹生島を一周した時の神秘な様子、鏡の様な湖面にパドルのつける音しかない心地良さ、強風のもとカヌーを超えてゆく波の怖さにおののいたこと、等々…。

また、オーパルの仲間達や息子とは、今までに3回、琵琶湖一周を完漕しました。

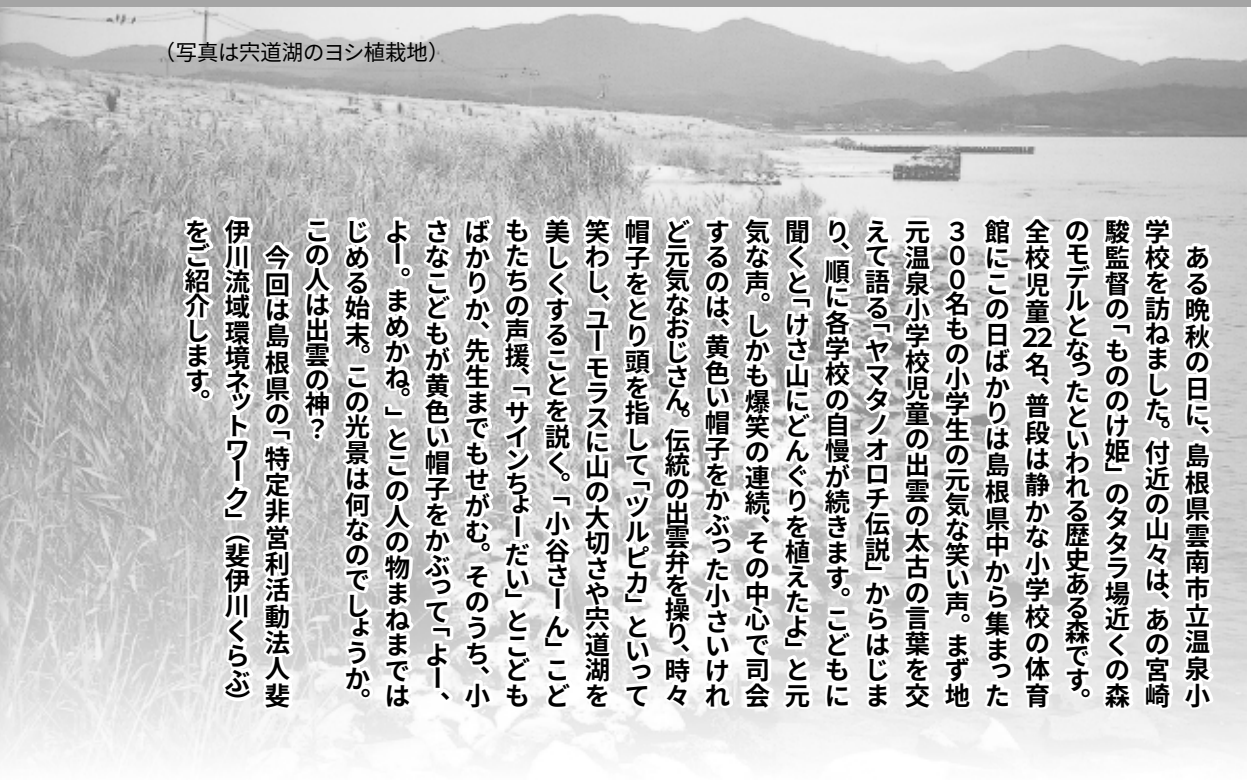
土曜、日曜の1泊2日で琵琶湖の行程を50㎞程進み、それを3度程しますと、だいたい琵琶湖を1周できます。そうすると、春・夏・秋、各々の琵琶湖の表情や水草などを、直に手に触れて感じることができます。例えば、春先5月の連休明けには、代掻きの濁水がいかに琵琶湖に流れこむかを湖水の境目によって知らされたり、一旦風が吹き始めるとこんなにも前進するのが困難になるものかと実感したり…琵琶湖の持つ偉大さ懐の深さを感じずにはいられません。

カヌーなどは、特別な訓練やスキルがないと出来ないのでは？と思われるかもしれませんが、運動量としてはウォーキング程度ですし、その位の力でも歩くよりは早く進みますので、1日5～6時間の漕ぎで、2日間で50㎞に達することができます。このように、どなたにでも取り組める体験ですから、できる限り多くの方に琵琶湖を感じていただけたらと願う次第です。

オーパルでは、滋賀の未来を担う子供達に『湖の子』による体験に加えて、『雪国で育った子供はスキーができる？』と同様に、琵琶湖を『体験』し、『楽しむ術』を学び、『想い出作り』をして欲しいとの思いから、年間5、000人を超える子供達にカヌーやドラゴンボートの試乗をオプテックス支援のもと行っています。

昨今の子供達は泳ぐのもプールが多く、琵琶湖といっても車窓から眺めるだけのものになっているのではないでしょうか？

やはり、我らの地域にこれだけの資源があり、それらを活かした教育、地域特性を活かした教育をすることが、地域を愛することに繋がり、そのことが琵琶湖に対する愛着、ひいては環境問題を考えるきっかけになると思うのですが如何でしょうか？


（写真は宍道湖のヨシ植栽地）

## 県外環境取組事例

# 行政と市民の「協働」を目指して

**ある晩秋の日に、島根県雲南市立温泉小学校を訪ねました。付近の山々は、あの宮崎駿監督の「もののけ姫」のタタラ場近くの森のモデルとなったといわれる歴史ある森です。全校児童22名、普段は静かな小学校の体育館にこの日ばかりは島根県中から集まった300名もの小学生の元気な笑い声。まず地元温泉小学校児童の出雲の太古の言葉を交えて語る「ヤマタノオロチ伝説」からはじまり、順に各学校の自慢が続きます。こどもに聞くと「けさ山にどんぐりを植えたよ」と元気な声。しかも爆笑の連続、その中心で司会するのは、黄色い帽子をかぶった小さいけれど元気なおじさん。伝統の出雲弁を操り、時々帽子をとり頭を指して「ツルピカ」といって笑わし、ユーモラスに山の大切さや宍道湖を美しくすることを説く。「小谷さーん」こどもたちの声援、「サインちょーだい」とこどもばかりか、先生までもせがむ。そのうち、小さなこどもが黄色い帽子をかぶって「よー、よー。まめかね。」とこの人の物まねまではじめる始末。この光景は何なのでしょうか。この人は出雲の神？**

**今回は島根県の「特定非営利活動法人斐伊川流域環境ネットワーク」（斐伊川くらぶ）をご紹介します。**

このくらぶは、宍道湖に注ぐ斐伊川流域の環境保全活動を国、県、流域市町村と一緒に進めています。理事長小谷武氏はいわゆる「県職OB、林業畑一筋の技術屋さん」です。

斐伊川くらぶは斐伊川流域において、主に次の4つの活動をしています。

**①斐伊川上流尾原ダム周辺の山にどんぐりの森を育てる活動。**

**②中山間地域活性化のための流域連携による上下流交流活動。**

**③菜の花を栽培し、バイオディーゼル燃料（BDF）を製造する活動。**（写真④）

**④宍道湖での竹ポットを利用したヨシ植栽活動。**

このような活動事業を軸に島根県の環境保全、中山間地域の振興、環境教育を同時に行っています。実は冒頭で紹介しました行事は、国土交通省、島根県、雲南市の協力で、午前中、斐伊川流域の12の小学校児童311名が、自身で作った竹のドングリポットと採取したドングリを主催者に贈呈して（写真①）、全員で植付け、午後に各小学校の交流会をやっているところでした。（写真②）

斐伊川くらぶは、1998年に島根県庁を定年退職した小谷武氏を理事長とし、斐伊川流域の環境保全や中山間地域の振興を目指す環境NPOとして発足しました。その特徴は、行政、各市民団体、小中学生、企業とが協働・連携して環境保全活動を推進している点です。島根県松江市にある地元県産木材を扱う業者組合がプレゼントしたという、斐伊川くらぶの新築事務所（写真③）で理事長にインタビューをしました。伝統的な出雲弁を話されるので、所々に標準語訳や解説をまじえます。

▲尾原ダムのどんぐりの森づくり（写真①）

**小谷　武　プロフィール**

林業の技術職として島根県庁に勤め、定年退職後、NPO法人「斐伊川流域環境ネットワーク」を設立、初代理事長となる。宍道湖のヨシ植栽や斐伊川上流へのどんぐり植えなど環境保全活動に努め、同時に山間部の就業対策、地域振興、環境教育など幅広い分野で活躍。また出雲弁を駆使したそのユーモラスな個性で、小学生ほか多くの県民の人気を集める。

▲温泉小学校の学習会（写真②）

## 理事長は県のOBと聞きましたが？

**小谷**　おれは県職員を退職した時に、そこまで（県職員を）やらせていただいてありがたいと思って、ここは社会へ貢献せんといけんと思うちょりました。そして欲と恨みというのを捨てた。これは捨てると楽になりますよ。それで人のためにということを二義的にした。自分のためにとすることできません。人あるいは地域のためにということで。とにかく地元の人を大事にすることを現役のころからやっちょります。だから異端児扱いされちょーですわ。「変っちょーな。」言われて「やかまし、おまえこそ変っちょーじゃないか。」言って。ふつうは行政は国から来たやつ（事業や人）をポンポン落とすんですわ。そうするとみんな腹が下がるでしょ。おれは今地元でどんなことが必要で、どげん（どう）すればどげんなーか（どうなるか）ということがわかっちょー（わかる）から、下から押し上げるいうて、それを国へ持ってけ、言って逆流させちょりますがね。今までのやり方と違うでしょ。おれが言っちょるのが本来の姿だ。

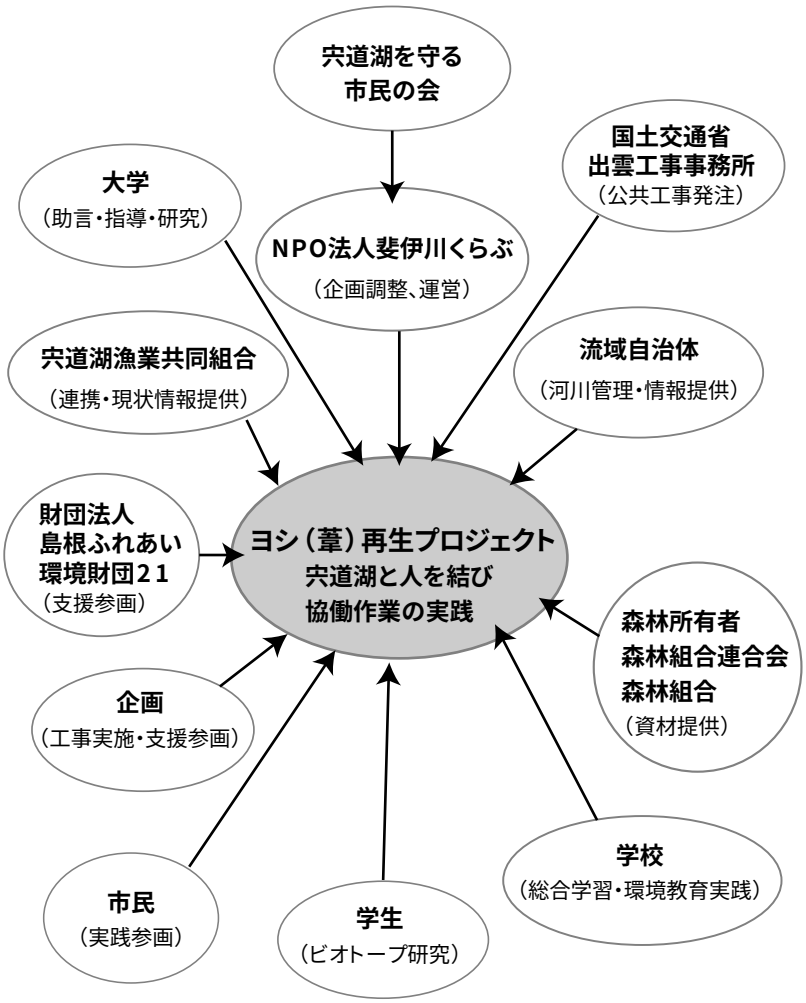
## 環境ＮＰＯの立ち上げは大変だったんじゃないですか？

**小谷**　当初ね、おれがこういう（環境ＮＰＯ）の考えたら、俺に業者登録とれっていつた馬鹿がおるんだがね。ほれ、なにを呆けたこと（ばかなこと）言っとうか、ものがわからんねって。ＮＰＯができて間もないでしょ。理解がなかったがね。ＮＰＯていうと金をたかって取りゃへんかいって、（世間は）なかなか理解しようとせんかったけど、信念はまげられんけんと、儲け仕事じゃないじゃないか。はじめはこんな事業までやるあれはなかったんだよ。これこのまま生きていこうと思ったら、それで「金が要らん」言っちょーけどほんとは金が要るんだがね。だから、ひとつの起業だと思っちょる。たとえば、役所へ、（なにか事業をするために）行政が雇うと一人１０００万円要るで、それが半値以下でやるなら（ＮＰＯに）やらせりゃいいじゃないですか。その代わり、責任があーよ（あるよ）。受ける限りはね。

## 斐伊川くらぶは、宍道湖や斐伊川流域の環境保全を行うために、まず図のような地域ネットワーク（図①）をつくられたと聞きました。

**小谷**　これ（地域ネットワーク）をつくるのに２年かかった。（はじめは地元の理解がなかったので）ふられても行くふられても行くで、出かけて口移し的に説得せんと。それと（ネットワークの中の各団体が）持ち場があることは認めてあげる。持ち場の中でやれることで、みんながやることやって輪になろうと、これがおれの考え方。一番大事なのは、関係者がそれぞれ持ち場持ち場をもっとるじゃないですか。それをきちっと動かすために自分の持ち場をはっきりさせ、自分の責任をはたいて（果たして）もらうことで輪ができたわけです。おれはここだと自分の陣地決めたんだ。ここまではおらがするぞと。ここらを明確にしょっと。やることについてはうちは真ん中に立つから国土交通省もあそこ（宍道湖　国土交通省の管理）を守るについては、守ることの守備範囲はあーけど（宍道湖は）みんなのもんだよ。特に宍道湖をしゃんとするためには、きちっとやってこんとだめでしょ。われわれ水の恩恵を受けーためには、まず川（斐伊川）がしゃんとしてごさん（いない）と宍道湖が死んでしまう、上流の水をいただく恩恵を受ける側が上流のことをよく理解して繋がるべきだ。こまったらお互いに助けあいっこするべきだ。こういうおらの考えかただ。そいで山を手入れすることは、地場産業の育成につながる。それが山の手入れ、ええ水につながるという論法です。上流の人と交流して、お互いに交流して理解をし

**図①　地域ネットワーク**




あいっこせんと、ただおれが理想的なこと言ったってみんなで（一緒に）お茶飲んだり話したりせんことには。

その時事務所スタッフより「理事長。松江の○○土建から電話ですが、今度の工事のご指示いただきたいと。」ゼネコン（地元の土木業者）も、国土交通省に聞かんとうちに聞くけんいけん。（その後宍道湖ヨシ造成地消波柵の工事指示）

**よく土木業者は頭からダメとかいうNPOが多いようですが？**

それするとね、輪（ネットワーク）がでけんじゃないですか。ひずみができちゃってね。

**斐伊川くらぶは、積極的に小学校に出かけて教育をしていますが？**

教育ていうのは大事なもんだと思って、後に続く者にいいもの残すのが先人の務めだとわたしは思っちょります。だけどもう一方ではこれから生きて行く子に、環境の問題でもなんでもいいから、自分たちがまわりの生き物でもいい、宍道湖でもいい、魚でもなんでもいいから、そういうもんに思いをよせてみんないい具合にしてやる。そういう思いを持たしとかんと、ケツ叩いて歩くような状態では、ダメだかんね。大人になっても、魚のこと宍道湖のことヨシのこと思ってごせよ（くださいよ）。（環境教育以外に）もっといい方法があればいいんだけど、ただ今現在それが最良の方法だと思う。でも思ったら実現せんことには話にならんが。

**理事長は、尾原ダム付近の地域振興に腐心されているようですが？**

**小谷**　わたしは（ダム付近の）人口増やいてあげることはできんけど、（一時的でも）人口を増やいて慰めてあげたい。（それで地域振興のイベントを企画して）最初頃はあまり人が集まらんだった。そこでそこの芸能を引っ張り出いた。（最初は）地元の人がなんぼか賛同して、イヤイヤやるじゃないですか、それでも成功だよ。よそのもん連れてきて、演劇会や映画会やったって人は来うせんよ。最初にやったのが子供神楽だ。「おのう太鼓」言って、子供と大人が敲くのもある。大人の神楽もある。地元の芸能を光り輝かせるということは、地元の人が最も惹かれることなんですわ、惹かれることを見つけてやらんとそっぽ向かれる。（そういったイベントの時は）ふつうは役場のもんが強制したりするじゃないですか、（動員なしで）役場

のもんが一生懸命やっとるんで町長に「おまえも出て」言って、両方の町長（島根県仁多町と木次町、現在は雲南市）が（イベントに）出た。「おまえものいわさいな（あなた何か言ってください）」言って町長に挨拶してもらって、このダムのところでは、「仁多町長と木次町長がバックアップしていれたから、今日斐伊川くらぶあるのは、こん人とこん人のおかげだ。」とおれが言うと、黙っとっても500人から来るようにな一だけん。そこに（イベントをやる会場に）台がないから、国交省に泥（土砂）持ってきて台作れや言って演芸台だわ、台作らしたんだ。それから台のまわりに花いっぱい植えて、花畑の中で中学生のブラスバンドやらせるからいって、花の種蒔いて業者も協力してちょーす（くれる）。（NPOは）スタッフに恵まれるとこういうこと（いい状態）になー だがね。はじめは大変だったけど、今はやっぱ、やってよかーたな思っちょります。

いろいろ制約の多い行政に代わり、これからの社会の様々な事業の担い手として、全国に次々と誕生した環境NPOですが、その運営については大きな壁に付き当たっていることが多いようです。原因は、まず財源。西欧諸国のように企業からの寄付で運営するという風土が現在の日本にはなく、多くは行政等からの補助金に頼らざるを得ません。ところが、NPOになっていいことをしていれば行政は自然に助けてくれるという認識の甘さがあったようです。また行政が仕事を任そうとしても、NPOに環境保全を行う企画力やノウハウがないこと、またお役所特有のものの考え方や手続きが一般の人にとっては理解しづらく、いざなにかやろうとすると大変な手間がいるため挫折してしまう。さらに悪くすると、行政嫌いになって対立し、結果地域社会の改善が遅れてしまうという悪循環になってしまいます。

先号からの取材を通して、斐伊川くらぶの小谷氏やアサザ基金の飯島氏は、自然保護や環境保全のプロで、かつ行政というものを知り抜いておられます。さらに企画力もあり、人間的にも魅力的で人との交渉術も巧みです。しかし、こういったスーパーマンは、日本の環境NPOにはそうはいません。しかし明日のためには冷静な分析が必要です。左記3点が現在の課題といえると思います。

①行政の行っている事務や事業の知識経験。
②生物学、化学、土木技術、法律等の知識
③営業マンが持つような人との交渉力

環境NPOに専従者がいなくても、公務員やそのOB、技術者、学者、一般企業に勤める人や商店主が少しずつ協力して、小さなことからやっていけば社会的な活動は前進すると思います。NPOについては今後様々な意味で社会の認知度期待度は高まってくるばかりですので、現在の壁を打ち破ってがんばってほしいものです。

斐伊川くらぶ事務所［松江市］（写真③）

菜の花種取り（写真④）

体育館での環境教室

どんぐりの森づくり

くらしの特集

# 琵琶湖ホテルの秘味（ひみ）つ

琵琶湖ホテルは滋賀県を代表するホテルのひとつです。県内外のお客様を持てなすことは当然ですが、ISO14001を取得したり、琵琶湖の水環境に配慮したホテルとして有名です。今回は多くの食材を購入し、調理している琵琶湖ホテルレストラン部門の志村昌彦さん（西洋料理の副料理長）に琵琶湖ホテルの取り組みをお聞きしました。

## よい食材とは

お肉や野菜といったレストランで使われる食材は、どういうものを選ばれます。

**志村　そうですね。お肉に関しては健康な、運動量の多いお肉を使用したいと。野菜に関しては本当に無農薬、有機のものを主に使っております。**

肉は運動量と言うのは結局、牛が放牧と言うか、放し飼いになっていて。

**志村　そうですね。環境がよくて、ストレスのないと言うのですか、そういう環境の下で育てられたお肉がいいのじゃないかなと私は思っています。肉を買う場合とか、選ぶ場合、そういうことをよく肉屋さんと相談します。**

野菜はなるべく無農薬のものをとおっしゃっていましたが。

**志村　形には全然こだわっていないのです。ですから形が多少悪くても、大き過ぎても、そのお野菜が、農家さんが心を込めて大切に育ててもらったものであれば、使用します。それの方がおいしいですし、料理をする上でも、規格にそろったものよりもいろいろと頭を悩ませて使いますから、楽しみです。**

お魚なんかはどうですか。

**志村　お魚は、今は山陰の物をほとんど使っています。山陰の、鳥取県の米子、それと境港、この2つの港から直送でやっています。向こうのお魚は面白いです。私が山陰出身なものですから、なじみがかなりあってということです。一匹、使いたい部位で、要らない物、ごみまでを買う必要はないですし、きょうは骨でだしを取りたいなというときは、あらも頭もみんな送ってもらいます。要らない部分は、よそへ回してくださいというふうに魚屋さんにはお話ししています。**

それはISOの14001を取られたからだというわけではなくて。

**志村　いえ、いえ。うちの場合、お客さまの入客数とごみ量が単価で出ますので。その毎日の計量が多いとか少ないとかということがありますので、そのへんでもかなり意識しながら、ごみ量を出すようにしています。できるだけごみは出ないように。余分な部分は、よそで使ってもらえる部分はそっちの方へ回していただきたいなと。**

## 棚田の保全とグルメ米

レストランで使うお米の話ですけれども、仰木（オオギ　大津市）あたりの棚田のお米

を使われているということですね。

**志村　古くからの棚田は、かなり人間の手を入れないと、あれだけ立派なお米にはなってこないと思います。やはり本当に水がきれいだと思います。環境もいいですし。その辺でしょうね、やはり。「自然を食べている」という感じがします。**

棚田のお米に目をつけられたというのは、なかなか面白いなと。これは1年間で何トンほど使われているのですか。

**志村　棚田の米で7トンぐらい。ホテル全体では20トンぐらいで、まだまだ35パーセントぐらいで。お米がもっとできればいいんですが、でももう限界でしょう。圃場整備をしていない棚田のお米を、ずいぶんこちらでお願いをしているので。**

圃場整備していないというのは何か理由があるのでしょうか。

**志村　未整備の棚田とかにはすごく生命体がいるんですよ。ただし、耕作放棄などで、その地区ではその環境とかが維持できなくて、お米の購入をすることで棚田の維持と環境保全するという会社としての立場を表明しましたので。レストランで食事の後、おいしいからショップで買って帰られる方も多いです。**

## 手がかからないのがよい食材

ところで、料理に使う食材の第一条件ってなんですか。

**志村　おいしいということが第一条件です。あまり手を加えなくてもいいということが、次に出てくるのです。ですからいい物であれば、あまり手を加えなくても、そのまま洗っただけで出せるとか、焼くだけで出せるとか、炊くだけで出せるとか。いくつもの工程を組み合わせて、それをおいしいものにしていかなくてはいけないということではなしに、簡単に皿に盛れる物であれば、その方が全体を考えると、もっと安くていい物をということになりますから。**

素材の選択が後に全部影響してくるのですね。そこは大きいですね、やはり。悪いものは燃料を使わないといかん、無駄な手間を使わないといかん、どんどん無駄にコストアップしていっていますね。

**志村　ひとつ、よくやるのですけれども、うちは人参のムースというのをやるのです。**

人参のムースですか。

**志村　はい。ちょっと食べていただきたいのですけれども。普通に買ってくる人参をグッと炊いていくのです。ふつう人参にはお砂糖を途中で足さないとだめなのです。ですがいい人参というのはそれ自体かなり甘みを持っていますので、少し足すとか、全然足さなくてもいいという状態のものもあるのです。それを裏ごししまして、生クリームと合わすだけで、それが商品になってしまう。（写真）**

左からカリフラワーのムース
人参ムース・セロリラブ（のムース）

（読者の皆様には失礼ながら、代表で試食させていただきました。大変おいしかったです。）

**志村　人参ひとつにしても、それだけ違ってくるのです。あと何か足さないとだめだとか、これにはちみつを足すであるとか、砂糖を足すであるとか。こっちはかたや何も足さずにただ炊いているだけ。この違いが明らかに出てきます。という野菜の面白さというのですか、これはよくあります。ほかにも、いろいろあると思うのですけれども。ムース類はいっぱいできます。人参もあります。セロリラブというのもありますし、カリフラワーもや**

**ります。玉ネギもやります。玉ネギとか人参とかはすごく極端に出てきます。**

## 上手な調理とは

例えば野菜を買った時、1つの料理に全部使えるということはないと思うのです。どのように使うと一番いいのだろう。どういう野菜が例えば一番使いやすいのだろうとか、教えていただけると。

**志村　皮とか外の部分がありますよね。捨てがちですけれども、私どものように大きなレストランになりますとかなりそれが出てくるわけです。それを洗って置いておいて、スープのベースに使うわけなのです。外側はすべて残しておいて、それを野菜だけを集めて、1回お水を入れて、塩を入れて、コトコト炊いてしまう。それをこすだけで、すごい野菜のエキスのじゅうぶん入ったスープが出るじゃないですか。それをベースにお肉を入れるであるとか、カブならカブをそのスープで煮込んで、カブのスープにしてしまう。大根のスープにしてしまう。白菜でしたら、外側はぐうっと一緒に巻いてしまって、白菜のステーキのように丸くして使ったり、というような使い方もします。**

皮だけじゃなくて、余った物も煮込まれるわけですか。

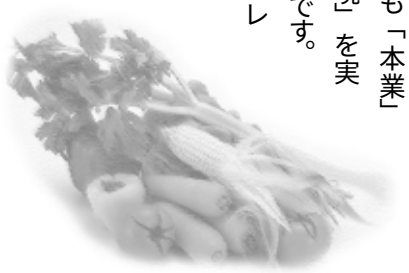
**志村　大根でしたら頭の葉っぱの部分がありますよね、この部分。白菜でしたら外側、キャベツも外側。人参でしたら皮をむきますよね。皮を一緒に残します。それである程度の大きさにバサバサと切ってしまって、水をダアッと入れて沸騰させて、だいたいこれで30分から40分ぐらい。それで、いいだしが出ます。いろいろと強い野菜、弱い野菜というのがありますから。**

強い、弱いというのは。

**志村　やはり人参とかだと、かなり味とかコクが強いですから、その辺がぐっと出てきますし、青物ばかり入れ過ぎると青臭いだしというか、ブイヨンになってしまいますので、その辺はよく考えて、バランスがいいように。玉ネギもそうですね、皮の部分とか、コンソメの色出しとかに使うのです。これをオーブンで焼いてしまって、真っ黒になった部分を入れると、コンソメが淡い色に着色できるという、そういうことにも使います。**

**ほかに、よくサラダ用に使うのですけれども、楊枝菜、間引き菜と言われる野菜ですね。確かに柔らかくて、赤ちゃんを食べているような野菜ですので、だけど栄養価もかなり詰ってあるという。ですからいろいろな物をサラダに混ぜます。普通、昔でしたら、そんなの、あくの強い物はだめだと言われていた、火を通さないとだめだと言われていた物も、ザッと洗って入れていくと、結構おいしいです。苦味もあったり、甘みがあったり、辛味があったりして。ですから間引き菜をよくうちのレストランで使います。**

かつて「飽食の時代」というのがあって、高級レストランというと、贅沢な食材をふんだんに使用し、惜しげもなく捨てるようなイメージを持った人が多いかもしれませんが、ここは違いました。賢明な読者は、このレストランが皮や間引き菜ばかり使用して営業してないことは、もちろんご理解いただけると思います。志村シェフは、よい食材の本質を理解し、素材の持ち味を活かして、お客様に提供しています。それでかつ経営的にメリットを出し滋賀県の環境に貢献しているようです。この方も「本業」を実践されているようです。取材の帰りに、レストランのお客様が、お米を買っているのを見て本当に驚きました。



市町村 エコの輪

# 市町村エコの輪
# 生ごみ堆肥化とエコライフの楽しみ
## ～水口エコライフの会

10月１日の合併により新生「甲賀市」が誕生しました。県土の12%を占めるこの故郷は、豊かな自然に抱かれた心安らぐ地域です。その中で先人達は水と土を活用し農業を営み文化を継承してきました。また、一方では、京阪神と中京圏の中間という位置にあることで内陸型の工業立地を促進するとともに、ベッドタウンとして人口が増加したことから、近年は水の汚れやごみの増加が気になるようになりました。

豊かな碧水・人・緑を次世代に引き継ぐために私たちがやらなければいけないことは何かを話し合うために発足して３年、地域環境の状況を知ること、学ぶこと、そして資源循環型社会を目指して様々な活動をしています。その中心的な活動である「生ごみ堆肥化」の取り組みについて紹介します。

## 循環型社会を体感できる「生ごみ堆肥化システム」

### 生ごみ堆肥化システムの概要は、

①区・自治会または、ごみステーションの単位で市役所に説明会の申し込みをする。

②説明を聞いて事業参加者を募り、名簿を提出。参加者は生ごみ処理容器（蓋付バケツ）を各世帯で用意する。

③市役所がごみステーションに回収ボックスを配置し種堆肥（生ごみ堆肥）を配布。

④各家庭で生ごみ処理容器で生ごみと種堆肥を交互に入れ、溜まればごみステーションに持って行き、回収ボックスに投入する。その時に配布された種堆肥（週１回８リットル入り）を持って帰る。それを繰り返す。

⑤市役所は回収ボックスを回収（週２回）し、生ごみ堆肥化施設に搬入し約60日間かけて種堆肥にし、再び袋詰めをしてごみステーションに配布。

⑥参加世帯で余った生ごみ堆肥は家庭菜園や花壇に使ってよいことになっている。

## 資源循環を体で感じることが大切
### ～生ごみ堆肥化事業参加者の声

○想像していたより簡単。１日でも早く１軒でも多く広がることを期待します。
○夏場の気になる生ごみの臭いも分別することと種堆肥の吸水性でずいぶん解消されました。
○作業も簡単だし第一節約もできて物を大事にするようになりました。
○猫がうろつかないので助かります。
○自宅の畑で堆肥化していたが、臭いがしたり虫がわいたりして困っていました。事業が本格的になったら畑の肥料として種堆肥を分配してもらえれば有難いと思っています。
○この事業に参加し少しでもごみの軽減に努め、住みよいまちにできたらよいと思います。

## 甲賀市全体へ～

旧水口町で始まった生ごみ堆肥化事業に参加する世帯は、現在４３００世帯になりました。平成13年10月、行政の呼びかけにより水口町エコライフ推進協議会が発足し“協働”を合言葉に委員自らが汗を流すことで、ようやく「生ごみ堆肥化システム」が地域に根付こうとしています。合併により本会も行政の手を離れ自主活動組織となり「水口エコライフの会」として再出発をしました。これからは甲賀市全体で「生ごみ堆肥化」が理解され拡大するよう「楽しみながらエコライフ」をモットーにがんばっていこうと思います。

## 取れたて野菜育てて・食べて・楽しもう！

本会では、出来上がった生ごみ堆肥（種堆肥）の有効性を確かめるため、畑を借りて野菜の作付け試験をしています。エコライフの取り組みを継続するには楽しむことも大切な要素だと思います。

8月20日（金）生ごみ堆肥の作付け試験で獲れた玉ねぎ５００個を福祉施設に寄付しました。

11月28日（日）作付け試験で出来た大根と白菜を、甲賀市環境シンポジウムの会場で即売し、その売り上げを新潟地震の災害義援金として送ることができました。

12月5日（日）生ごみ堆肥を使ってプランター栽培の体験学習会を開催しました。当日は子どもから大人まで30名の市民の参加で好評を得ました。

# ヨシ紙ギャラリー

北村恵美子（日本画家）
琵琶湖のヨシを使った淡海ヨシ紙に滋賀県の自然を描いていただきました。

## 鴛鴦（オシドリ）

おしどりは、滋賀県でも一年中見られるカモの仲間で、樹木の茂る川や池等に住んでいます。水田で餌を捕ったり、大きな木の洞（うろ）で巣を作りヒナを育てたりします。自然豊かな里山を生活の場としていますが、東京の明治神宮でも見かけるようです。一般に鴛鴦夫婦とも言って、夫婦仲の良いことの代名詞になっていますが、夫婦でいるのは半年ぐらいといわれています。

# 「抱きしめてBIWAKO」で変わったもの

先号に続き「抱きBIWA」を考える企画です。事務総長として参加者集めなどにご苦労された「細谷卓爾」さんに聞きました。

## 「抱きしめてBIWAKO」とは

1987年11月8日に実施されました。琵琶湖の周囲約250キロを人の手をつなごうというイベントで、目的は当日の参加費を、大津市にある重度心身障害者施設「びわこ学園」の新築・移転費用の一部にしようというものでした。当日は県内外より約二十数万人が参加し、ほぼ琵琶湖一周を達成しました。市民主導で企画された、おそらく滋賀県で初めての市民参加型の福祉・環境イベントです。これは今をもってしても、日本の市民イベントの金字塔といえます。

**当時を思い出していただいて、どんなお話でも結構ですので。**

**細谷**　僕は、一番最初は（自分たちは）一般参加者と考えていたのです。だから（当時所属していた）湖南生協としてはどうかかわろうかと思っていた時で。最初に話を聞いたときに、必要な25万人のうち8、000人ぐらいは湖南生協から組織していかなきゃいけないかなと。しかし、どうも全体の事柄がうまく進まないのは、事務局のまとめがいないからと言うので、それで、引き受けてくれないかという話になったのがきっかけです。それが1987年7月7日。11月8日まで、後4か月しかなかったのですね。そのときに、中澤（弘幸）さんやみんなとも会ったりした上で、僕のアイデアでいいというならばやろうかと決心をしたということなのです。

**アイデアとは具体的にはどういった？**

**細谷**　（琵琶湖一周）250キロのうち、1キロならばイメージがわくのではないかな。1キロ単位に面倒を見る人を見つけて、1キロ単位に1、000人集めればいいわけだから、1、000人を集める人は「ツルさん」、100人集める人が「カメさん」、10人集める人が「ありがとうさん」という、そういうシステムを作ったんです。それが1つのアイデアだったのかな、と思いますね。

**まずどうされました？**

**細谷**　泣き言を言う暇もゆとりもないよね、もうね。4カ月しかないから。週に一遍ずつ事務局会議というやつをそれから持つようにしましたから。「いこいの村びわ湖」で毎週一遍集まって。

**それは何人ぐらいで集まられたのですか、そのときには？**

**細谷**　14～15人じゃなかったのかな。

**そういった中で各地区の担当さんにはどういったアドバイスをされました？**

**細谷**　毎週の集まりの中で、なんでそこがうまくいかないのかということを議論するのだけれども、僕は、そんな議論をするときに、相手がうちの事務局ですよね、事務局が悪いと言ったってしょうがないわけで、事務局の人がどういうふうにしたら動けるのか、どういう人にあたったら動けるのかということを一生懸命に言っただけで。ある地区で社協が動かないのに、なんでこっちの地区では社協が動いているのかというようなあるじゃないですか。その対比の中で、じゃ、社協ではこの人をやってみたらたぶん動くのじゃないのというようなことは結構アドバイスとしてはできたけれども。

profile

**細谷　卓爾**

「抱きＢＩＷＡ」では事務総長。総評滋賀県地評事務局長、湖南消費生活協同組合理事長、コープ滋賀理事長を経て、現在は、滋賀県貿易株式会社代表取締役社長、湘南学園理事長、しみんふくし滋賀理事長などを兼任。

## 参加者集め

**ところで一般の方に参加のお願いに行かれた時にすんなりと「出ますよ」と言っていただけたものなのでしょうか。なんといっても参加料が必要ですからね。**

**細谷**　お金が要るんですよね。1、000円のお金をどういうふうに集めるかということも、1つの重要な要素だったのです。それで、その1、000円を集めるのに、中学まではただにしよう、高校生も半分にしよう、だったかな。なんかそんなようなことで、割引きをしようというふうにして、（参加層が）ぐっと広がったということはもう間違いのないことですよね。それは、例えば4人家族で出るというふうにしたときに、夫婦で2、000円、子どもで2、000円で、4、000円で1家族じゃ、とてもじゃないけど無理な話で、4人家族ではもう夫婦で2、000円で限界で、だから残りの2人はお金にはもう勘定しないで、人数として勘定しようというふうにして、（参加者を）ぐっと増やしたことは事実です。

**一般募集して、個人より団体の申込がすごく多かったんじゃないでしょうか？**

**細谷**　そうです。だからみんなも、当初、その「抱きしめてびわ湖」のときに、呼びかければそれでいいのだと。呼び掛けて、来るのもよし、来ないのもよし、それでもういいのだというふうに最初は言っていたのです。だけど僕は、そんなふうに呼びかけて、来る人もよし、来ない人もよしでは、話にならない。それではだめだから、呼びかけた人で、呼びかけ人が町長であれ、なんであれ、それで人が動き出すのだから。そういうものを考えの中に入れないことには、とてもじゃないけど集まらないというふうに僕は思いました。だから、そうね、そんなふうに個人の判断で（来たい）というのは少なかったのじゃないですか。

**さらに「抱きBIWA」を成功するために参加人員の読みは大切だと思うのですが？**

**細谷**　7つのブロックに分けてブロックごとに責任者を設けて、「そのブロックの責任者が何人今集めているか」とか、「どういうことになっているか」とかというのを整理していったことは間違いない。だからブロックを超えてどうのこうのということはできなかった。その中でどういう人間が、どういう組織をしているのかということ（明らかにすること）をやっただけ。（たとえば）僕の場合は生協がひとつのあれ（参加できる団体）ですけれども、あとは労働者対策協議会というのがひとつの柱で、5万人だったかな。

**実際細谷さんは？**

**細谷**　各ブロックは各ブロックの責任者が飛んで回っているわけやから。ただ湖北では担当者が体調不良で、動かなくなって、仕方ないから（湖北の）担当者のとこにもうぺったりついてやったというのは、事実です。だから、東京の人とか大阪の人とか、こっちへ関心のある人、ぜひ湖北に来てくれと、こっちでなんとでも持たせようというのでやっていたから。その日は、人が来て僕もそこにいて、天気を見ていて、そのときは雨模様だったのです。それがだんだん天気が晴れてきて、これはいけるぞというふうになったのですから。そのときは僕は、奥琵琶湖のとこで湖北町にいたのです。そこで全部、采配していた。

## ●●●「抱きBIWA」の効果、社会への波及●●●

**実際、お金（約6，000万）が集まって、寄付ができたわけですが、その後の成果というのはどういうふうにお考えになります？**

**細谷**　その後はざあっと広がっていったのじゃないですか。いろいろなことが。

**それは福祉の世界に限られてということでしょうか？**

**細谷**　そうじゃなくて。だって「抱きしめてびわ湖」のときに、福祉の世界で動く人なんてほとんどいなかった。

**そうなんですか？**

**細谷**　いないですよ。そのころ福祉の世界というのいうのは本当に少数の人の集まりで、福祉のことというのは、そういう人の本当に地域を憂いてやる人たちが、いてもたってもいられないから動き出したみたいなところがあります。そのときがそのタイミングだったのじゃないかなというふうに思いますね。だからそのことがきっかけで地域のほうにいろいろな動きができたということは言えるんですね。僕は思う。例えば、そんなことだから、僕は介護保険制度にどの程度、役に立ったか知らないけれども、たぶん「抱きしめてびわ湖」のイベントがあって、そういうものにみんなが動いて来たということが底辺には僕はあると思います。日本の底辺の中にね。それじゃなきゃ、ああいうふうな介護保険なんて制度が生まれるわけがない。

**潜在的にはそういったものがあって。**

**細谷**　そう、そうです。それは僕は言えると思う。だからたとえばしみんふくしの成瀬さん。僕が今、理事長をやっているしみんふくしの人なのですけれども、そういう人たちがあって、なんやかんやといって動いています。そういう動きの中には、こういうものは必ずあると思います。市民福祉が動き出したのが、88年か89年。そして、国際フォーラムを3回やっているわけですから、僕らの力で。そういうのは、やっぱりずいぶん力になっているのじゃないかと思います。

さらに「抱きしめてびわ湖」が終わった後、環境でも琵琶湖を汚さないために新しいシステムが要るのではないかということで、署名運動をやったのです。それで30万人ぐらい集まった。それが環境生協を作るきっかけになった。

**今後環境の活動をされる方にアドバイスを。**

**細谷**　福祉の人も、その当時は、人にものを頼むときに、「自分たちはいいことをしているわけだから、（他の）人は動け」という態度で始めたのです。僕はそれは間違いだと。（自分が）やって（まわりに）頼んで、そして（はじめて）人が動き出すのだから。逆なんです。だから、天動説と地動説という話を言ったのですけれども、あなた方は天動説です、当時の福祉の人は。（いいことだけして社会が動くのを待っている）天動説だから。そうではなくて、（自らがまずやってまわりにお願いして自分たちが動かねばならない）地動説なのだから。「地動説で人は動くのだから、後を成果としていただけばいいというふうに僕は思うよ。」というのを、この議論のときにはずっと言っていたことです。だから天動説に対する地動説です、僕の役割は。今、僕は福祉の世界では、しみんふくしと湘南学園と2つに関わっているのですけれども、特に湘南学園は地動説で動くというふうに言っているからね。天動説はもう言わないな。

**細谷さん、ありがとうございました。前号からの取材を通じて、高邁な理想と優れた企画運営、担当者の努力の結晶体のような感じがしました。特にこのイベントを通じて、関わった方々が「社会を動かすにはどうしたらいいか」を学ばれたような気がします。「抱きBIWA」から約17年が経過し、私たちは次の社会をよりよくするためには、どうしたらよいか考える機会かもしれません。**

# 環境教育最前線！「菜の花環境学習」を極める

**環境を大切にする社会をつくるためには、環境教育は必要です。生涯教育はもちろんですが、特に小学校の頃から環境教育を受けることは、後のその人の人生や未来社会に大きな影響を与えるでしょう。滋賀県では県として環境教育を実施し、新しいやり方を研究しています。全国的にみて県のレベルで環境教育を中心にすえ推進しているところはめずらしいと思います。滋賀県総合教育センターで「菜の花環境学習」の研究に取り組む村地昭彦先生にインタビューしました。**

▲村地先生

## 環境教育では「行動するこども」を育てよう

大変立派な取り組みと思います。そこでまず先生が現在取り組んでおられる「環境教育」とは何でしょうか？

**村地**　昨年度まで小学校の教師をしていましたが、今年度から県総合教育センターで仕事をさせてもらっています。このセンターでは、教育現場で活用してもらうため、教育に関する様々な研究が行われています。私の場合、「環境教育」で、テーマが「循環型社会をめざす環境学習教材の開発」です。ちょうど県教育委員会の「菜の花で『うみのこ』を動かそう事業」（写真①）が動き出していますので、それをいかに学校現場に有効に活用してもらえるかとか、子どもたちが、身の回りの環境問題をしっかり見つめてくれるための学習プログラムを考えています。

※１　うみのこ（写真①）
全国でもめずらしい宿泊施設を備えた環境学習専門の船。
滋賀県の小学５年生は全員１泊２日学習体験をする。

（写真②）
「うみのこ」の船内の菜の花学習の説明

## 特に大切なことは

**村地**　滋賀県は、これまで環境教育に対して先導的・積極的に取り組んでいます。琵琶湖をあずからせていただいている関係上、水関係の研究なども盛んに行われています。また市民レベルでも大変進んだ取り組みがあり全国的にも注目を集めています。学校でもそうです。「総合的な学習の時間」に、環境教育を柱として地域の様子に目を向けたり、保全に向けての取り組みをしたりしています。

　先ほどお話しした県教育委員会の事業も含めて、こうした取り組みが、結びつきあって効果を高めていくことが大事ですよね。私が、今やっている研究も多くの取り組みと関連づけて効果を高められるように考えています。

　それから、もう一つ大事にしたいことは「行動化」ですよね。どこまで子どもたちが自分で判断し、環境実践に取り組んでいけるかは、知識だけ詰め込んでもだめで、実感する事が大事です。「なるほど！」とか「大変だ！」といった感性に訴えかける学習活動でないと、環境教育はどうしても、他人事で終わってしまう。知っているけれどもできないというのが最後に残ってくるのじゃないかと。いろいろ勉強していく中で自分との関わり、今、起こっている問題は自分の生活とどうつながっているのかという部分を常に意識させながら危機感と切実感を持って「自分がしなくちゃいけない」「このままでは大変なことになる」というような思いを持って欲しい。そうすることによって、小さな一歩かもしれませんが、子どもたちが自分で考えたことを自分で行動していくことが積み重なって、またそれが増えていくと、大きな力にもなるし、環境を守ると言う意味でも大変力強いものになるんじゃないかな。まさに「環境実践する子」を、と考えています。

## 全県の児童対象の「菜の花環境学習」を

　それでは、いよいよ具体的な「菜の花環境学習」のプログラムのお話を。実際の反応や行動化の実例などありましたら。

**村地**　県教育委員会の事業は、3年間のスパンで考えられており、今5年生の子どもたちが、3年生の時に菜種を播きました。成長します。4年生になった春に収穫します。収穫した菜種はいったん子どもたちの手から離れて、搾油、油を搾る所です。搾油工場に運ばれます。搾られた油は学校給食に利用されます。利用後の油、つまり廃食油ですが、さらにBDFというバイオ・ディーゼル燃料に作り変える工場に運ばれ、その燃料が、5年生になった子どもたちが乗る「うみのこ」の燃料として、給油されるんです。（写真②）この事業で、子どもたちは3年生と4年生まで蒔いたり刈りとったりして関わっているんですが、収穫後の活用の場面はなかなか見ることができないんです。油を搾る様子だとか、給食の調理場面、「うみのこ」への給油なんかも。しかたないといえばしかたないんですけどね。

　今回、この事業に関わる研究をさせてもらうことになって、「じゃあ、見えないところを見えるようにしてみよう」って考えました。というのも、子どもたちは、収穫した菜種が、すぐ「うみのこ」の燃料になっているって思っていた子もいたからです。菜種は、搾って調理に使ってるんだよ、搾ったあとの搾りかすは、肥料にもなるんだよ、調理に使った油に手を加えて燃料になるんだよって。ここが資源の循環というポイントでもあるんです。だから、ビデオで施設の様子を収録させてもらって、授業で見てもらいました。かなり真剣に見てくれました。

　でも、これだけじゃ、受け身の学習ですから、今度は、自分でも実際にやってみようって「体験」を組み込んでいきました。調理でポテトチップスを作ったときは、家庭科室に菜種油のいい香りが漂いました。

「うみのこ」のカッター訓練

## 菜の花と油かすとの関係をつなぐ

**村地**　そこで話がちょっと前後しますが、菜種を搾れば、搾りかすが出ますよね。「油かす」です。家庭でも、学校でもなじみのある肥料です。子どもたちも学校の畑でよく使っているんです。でも、ビデオを見た後、「あれが、油かすなんだ！」という驚きと発見があった訳なんです。正直意外な場面でした。私は知っているって思っていましたから。子どもたちの発見はそれで終わらず、「搾ったかすが、ごみにならずに、また畑で肥料になって役に立ち、また土に帰る」って。これまた資源の小循環ですよね。この後、ポテトチップスを作ったわけです。揚げたては、からっとしていておいしかったですよ。

その後、問題になるのが、「油の処理」です。今回は、3つの小学校さんにお願いをして授業をしていただいたんですが、そのうち、2つの小学校の校区は廃食油の分別回収がない地域で、どこの家庭でも、油は「廃棄」つまりゴミですよね。子どもたちも当然そう考えました。分別回収している地域の学校も、案外家の事は知らないようで「捨てる」って考える子どもが結構いました。捨てたらゴミですよね。油は。しかも捨て方次第では非常に汚染物質にもなります。そこで、今回の取り組みでは、「まだ使えるよ」って二重三重の活用をしていったわけです。その一つの方法が、今度君たちが乗る「うみのこ」の燃料になるんだよって。今まで見えていなかった部分を見せていく形で、なおかつそれぞれの段階で自分も参加していき、なるほどという実感ですよね。

## 菜の花せっけんづくりをしよう

**村地**　「うみのこ」の燃料だけでは、まだそれも体験にまではいかないので、そこでもう一押し、廃食油を自分たちで何かリサイクルできる方法はないかなということで、今回、廃食油でせっけんを作ってみました。（写真③）そのせっけんは後で実際に使ってみて、役立つものに変えられたという実感や、洗濯排水と琵琶湖とのつながりを考えたりしました。それぞれ、使った後の事を考えていく。それは果たしてゴミなのか、それとも資源なのか。持続可能な社会を作るためにも、考えていきたい、考えさせたい所です。

究極のねらいは、この菜の花の事業が理解できるというだけでなく、視点を広げて、身近な環境問題に積極的に関わっていこうとする所なんです。大量生産、大量消費、大量廃棄が半ば当たり前になってきている今だからこそ、そこらへんを、子どもたちに見つめ直させる。それがないと、さっきも言いましたように、知識だけで行動力が伴わない結果になってしまいますからね。ただ、小学生を対象にしていますから、そう、広く、深く内容を扱えるわけではありません。さしあたって、自分の生活や、家族、地域から、無駄を見つけたり、自分にできることを考えさせたりしていくことがスタートになるでしょうね。そこから、自分はこうしていこう、と行動にうつしていくことができる子どもをつくっていくことが研究のねらいでもあるんです。

今回、協力いただいた3校さんは、それぞれ、同一の内容で学習を進めてもらったんですが、後半の部分は学校の特色を活かしてもらいました。菜の花の学習から、ペットボトルや紙、びんのリサイクルに視野を広げて調べた子もいますし、琵琶湖というのは滋賀県民共有の財産でもありますから琵琶湖の問題、水質汚染ですね、あるいは、地域の進んだ取り組みを調べて、郷土の良さにふれたり、保全意識を高めた子もいました。今後も、様々な環境問題に関心を広げ、自分なりの考えが持てる子どもを育てていくために取り組みを続けていきたいと思っています。

写真③　菜の花油のせっけんづくり

環境教育の目標もよくわかりましたし、村地先生の熱意が伝わってきました。何か明日の滋賀県の子どもや社会に大きな期待がわいてきました。

## ヨシ群落造成事業 12月

琵琶湖のヨシ原を回復するため、大津市の天神川河口付近に漂砂止め木柵を4か所設置しました。台船から機械で木杭を設置している写真です。

## 家族ISOプログラム普及推進事業

滋賀県の約3,000世帯の家族が登録し、家庭版ISOとしてエコ生活に努めました。

## ヨシ苗育成事業

本年度草津市下物のヨシ圃場にて、ヨシ苗約25,000鉢、ヨシマット約8,000枚を生産しました。

## ヨシ紙芸術展事業 12月

琵琶湖のヨシで作られた淡海ヨシ紙で書画の作品を募集し、多くの応募作品の中から、書48点、画38点の入賞作品が、県立近代美術館で展示されました。

## ヨシ腐葉土製作事業

琵琶湖のヨシの有効活用で、ヨシ腐葉土を約8,000袋を製造し、全国の菊花愛好家などに販売しました。

# 財団活動紹介

本年度下半期も、琵琶湖の環境保全を中心に様々な事業を実施しています。
滋賀GPNの５周年記念事業や温暖化月間のイベントなど、１月までに行われた主な事業をご紹介しましょう。

## 滋賀GPN5周年記念事業 11月

滋賀県のグリーン購入推進に取り組む滋賀ＧＰＮの設立５周年を記念するフォーラムが、琵琶湖の観光船ビアンカ等で盛大に催されました。

## ヨシ炭化調査事業 11月

ヨシを炭焼き窯で焼いてヨシ炭を製作しました。水質の浄化や菊の栽培に使用し、効果を調査しています。

## ヨシ刈りボランティア事業 12~1月

12月から琵琶湖周辺各所で、多くのボランティアさんが参加し、ヨシ刈りやヨシ関係のイベントが実施されました。

## 地球温暖化防止活動推進センター普及啓発・広報事業 12月 ほか

12月は地球温暖化防止月間です。滋賀県地球温暖化防止活動推進員を中心に県下各地で啓発活動が催されました。

# 環境滋賀　私の意見評論

## 五色の滝に登って

宮川　琴枝（長浜市）

先日、伊吹山中に五色の滝をたずねた。曲谷ユリ園の一寸手前からその山道は始まった。胸を突くような急な坂道や獣道のような細く険しい道を本当はほんの用心のためにと思い持って行った杖にすがりながら登っていくと、そこには橋のない急流が待ちかまえていた。どうやらこの前の大雨で丸太橋が流されてしまったようである。先導の数人が膝下までずぶぬれになりながらその流れの中の一抱えもある岩をいくつか寄せて飛び石を作ってくださった。やっとの思いで向こう岸にたどり着き、しばらく行くと今度はもっと大きな流れに出会う。丸太と岩の急拵えの橋を滑りはしないかとおっかなびっくりで両側から支えて貰いながらの渡川となる。総勢50人ほどの全員が渡り終えるまで地元の人たちはずぶぬれになりながら川の中にいて下さった。「ごめんなさい。冷たいでしょう。寒くはないですか」「嫌々平気ですよ。地元ですからすぐに着替えられますよ」でもまだ滝に着いたわけでもなくこのままで大丈夫かしらと心底気にかかる。

途中の流れを手で掬いながら「この水は花崗岩地帯を流れているので本当に美味しい水ですよ」とすすめてくれる人がいた。一口飲んでみると将に甘露甘露。「え！伊吹山って石灰岩じゃないんですか」「ほら見てご覧なさい。このあたりの岩は全部花崗岩ですよ。此処はつい先頃まで上質の挽き臼が作られていたところです。」見ればそこかしこに臼の未完成品がうず高く積み上げられている。臼谷の由来だ。先人はこんな山奥からこの臼を背負って里まで降ろされていたのだとか。「日本人はお米を食べているから力が出たのですよ。研究者が試しに何人かの人にパン食をさせてみたところ、摂取カロリーは代わらないのに、力が出なかったと言うことですよ。」成る程成る程と合点する。

此処ではたと気が付いた。今まで沢山の小さな滝を見てきたのに、カメラを手にぶらさげていながら私は殆どなにも写していなかったのだ。

突然、岩盤の上を勢いよく流れ落ちる滝が目に飛び込んできた。五色の滝だ！それは想像していた滝とは違い、広く長い幾つかの岩盤の上を滑るように流れ下る清流である。曇ってはいたがそれでも鮮やかな色とりどりの紅葉に映えて美しい！思わず何回も何回も大きく息を吸い込んだ。

今、エコツーリズムと盛んに言われているが、ここに登山道など出来ません様に。沢山の観光客で自然が踏み荒らされません様に。自然は自然のままでおいて欲しい。こんな願いは私だけの我が儘だろうか。

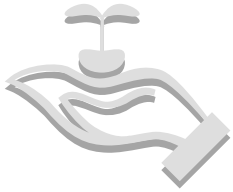
# 滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより

## ～地球温暖化基礎知識～

12月は、地球温暖化防止月間です。滋賀県地球温暖化防止活動推進センターでは、12月3日から5日にかけて草津市内の会場で、草津市や推進員の皆様にご協力をいただき、シンポジウムやマンガ展、ソーラーカー工作教室、温暖化クイズなど県民の皆様に地球温暖化防止を訴えるイベントを実施しました。

草津での温暖化クイズで推進員さんが来場者に説明をしているところ。

### 温暖化を防ごう！クイズ

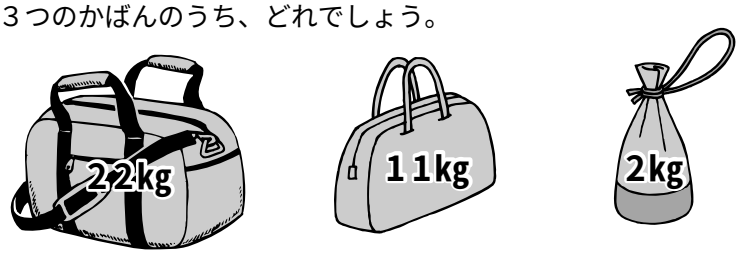


**クイズ展の中からも１つ出題しています。**
**皆さん、是非挑戦してみてください！**

Q **1．下図の３つのかばんをみて答えてください。**

実は、この中には、アメリカと中国と日本の国民一人が一日に使うエネルギーを原油換算した重りが入っています。

そこで問題です！日本の国民一人が一日に使うエネルギーは次の３つのかばんのうち、どれでしょう。




Q **2．蛍光灯と白熱電球では、どちらが電気をたくさん使いますか。**

蛍光灯　　白熱電球

**私たちは、石油などの化石燃料を燃やしてエネルギーを生み出し、電気をつくったり、車を動かしたり、工場の機械を動かしたりしています。ですから、エネルギーをたくさん使えば、地球温暖化の原因のひとつであると言われている二酸化炭素も同じようにたくさん排出されます。**

### 具体的には何をしたらいいの？

**では、どうしたら私たちが使うエネルギーの量を減らすことが出来るのでしょう。**

**例えば、ご家庭では「温水洗浄便座」をお使いでしょうか？電気によって便座を暖めているので、寒い季節でも安心して腰を掛けることが出来る様式トイレの便座のことです。**

**この便座で出来ることがあります。それは、使わないときには、ふたを閉める ことです。便座のふたを閉めるだけ“でも放熱を防ぎ、エネルギーの節約が出来ます。**

**地球温暖化という大きな問題の前に、このような取り組みは小さすぎるように思われるかもしれません。しかし、このようなちょっとした節電を全世帯で取り組めば、とても大きな効果が生まれます。**

**みんなで力を合わせて地球温暖化を防ぎましょう！**

**上記のクイズの答え**

1．日本の国民一人が一日に使うエネルギーは11キロのかばんが正解です。
ちなみにアメリカは22kg、中国は2kgです。

2．蛍光灯と白熱電球では白熱電球の方が電気をたくさん使います。

明日の淡海 Vol.12
2005.3.1発行
発行 財団法人 淡海環境保全財団
〒520-0807 大津市松本1丁目2番1号 大津合同庁舎内
TEL：077-524-7168 FAX：077-524-7178
E-mail：info@ohmi.or.jp URL http：//www.ohmi.or.jp

財団法人淡海環境保全財団のシンボルマークができました。
琵琶湖のヨシ原に棲むカイツブリ親子をイメージしています。

## 原稿の募集について

機関紙「明日の淡海」では、環境や自然に関心のある方々の意見・提言などを募集しています。

- 環境問題に対する考え方や環境施策への意見・提言等
- 環境に優しい暮らしにつながる意見・提言等
- 美しい自然や自然保護に対する意見・提言等

※採用分には薄謝進呈
※当財団まで郵送かメールまたはFAXでお送りください。

本誌は、環境や資源の有効活用に配慮した印刷物です